

ブラジル人学校における教育と父母の意識

○小野寺理佳 (北海道大学大学院)

○濱田国佑 (北海道大学大学院)

○新藤 慶 (北海道大学大学院)

小内 透 (北海道大学)

1. 問題意識

本報告の対象となる群馬県太田市・大泉町(以下、太田・大泉地区)は、日系ブラジル人をはじめとする外国人労働者が集住する地域として既によく知られている。

先年、我々は、外国人のうちの大多数を占める日系ブラジル人に焦点を当て、当該地区の多民族化・多文化化した日本の学校が地域社会においていかなる意味をもつのかという視点から検討をおこなった(「日系ブラジル人の定住化と学校教育の機能—群馬県大泉町を事例として—」小内透他、第52回大会、2000年)。その結果、学校はブラジル人と日本人の接触・交流の機会を保障し、セグリゲート化が進む地域社会において「共生」を実現させる橋頭堡としての可能性をもつとの結論が得られた。

本報告は上記の研究に連なるものである。今回は、対象を、近年開設された太田・大泉地区のブラジル人学校に移し、ブラジル人学校が地域社会においていかなる意味をもつのかを検討する。今津らは、東海地域のブラジル人学校について、ブラジル人学校は「開かれた場」として日本の学校や地域社会との積極的な関わりを望んでいるにもかかわらず、むしろ、日本の学校の方が「閉じたシステム」としてブラジル人に日本の学校文化を強いている現実を指摘した(「ブラジル人学校と日本の学校—東海地域の新来外国人学校調査より—」今津孝次郎他、第53回大会、2001年)。太田・大泉地区のブラジル人学校は果たして「開かれた場」といえるのだろうか。これについて知るためには、ブラジル人学校を構成する日系ブラジル人の親、子および教師の三者について、彼らの教育への取り組み、日常生活における日本人との交流、将来設計などを個々に検討することが必要となる。なぜなら、それぞれの立場に応じて、意識や行動を規定する論理は異なると考えられるからである。この場合、彼らは「帰国か定住化か」という流動的な問題を抱えながら教育と向き合わざるをえない状況にあり、そのことが、彼らにとってのブラジル人学校の意味づけを複雑なものにしていることに十分留意しなければならない。この点をふまえ、三者の分析のなかから浮かび上が

った「親の論理」「子の論理」「教師の論理」のずれや矛盾を正確に把握するところから、上記に掲げた課題を明らかにしていきたい。

2. 太田・大泉地区におけるブラジル人学校

ブラジル人学校の展開過程を一言でいうならば、それは「補助的」な教育機関から「独立した」教育機関への移行といえることができるだろう。つまり、「日本の学校での教育を主な柱としながら放課後にポルトガル語やブラジル文化に触れる機会を提供する私塾」から、「ブラジルの教育制度に則って、自前で全ての教育を引き受ける学校」への転換がみられるのである。これまで当該地区の公立学校はポルトガル語のできる日本語指導助手を配置する等の対応をしてきたが、それは日本語で日本の教育課程を修めることを目的としたものであるため、ポルトガル語忘失や日本語環境への不適應という問題を生じさせてきた。従って、ブラジル人学校には、日本の学校の立場からいえば、学校や教師の手にあまる外国人の子どもの受け皿としての意味が、そして、ブラジル人社会の立場からいえば、ブラジル人としての子どもに相応しい場所を与えるという救済策としての意味が付与されてきた。

本報告では、「独立した」教育機関であるブラジル人学校3校を取り上げる。A校の前身はポルトガル語教室であるが、2001年よりブラジル人の生涯学習支援を行うNPO法人が運営主体となっている。5-15歳の約60人が通学するが、現段階ではブラジル教育省の認可は受けていない。また、日本の学校に通いながら放課後のみ参加できるポルトガル語教室も維持しており、「補助的な」部門も併設している。B校は、1999年ブラジルの大手私立学校の日本校のひとつとして開設されたもので、2000年ブラジル教育省の認可を受けている。3-18歳の約200人がここで学ぶ。C校は、1998年に開校し、2001年にブラジル教育省の認可を受け、5-15歳の約210人が学んでいる。この3校はいずれも、ブラジルのカリキュラムに則っているが、日本語・日本文化も教えるなど、ブラジルの学校とは異なった側面も持っている。また、日本の学校との交流も見られたが、現在はブラジル人

学校同士の交流の方が顕著である。

以下においては、2001年9月、上記3校に通学する子どもと親、およびその学校の教師を対象として実施した調査の結果をもとに、先に述べた課題を検討する。

調査概要は次の通りである。まず、親については、3校の全学年の両親計470人に調査票を配布し（留め置き法）、有効回収率は56.6%（266人）であった。子については、3校の全生徒計274人を対象に面接調査と配布調査（留め置き法）を行い、有効回収率は63.5%（174人）であった。また、教師については、3校の教師計32人に調査票を配布し（留め置き法）、有効回収率は40.6%（13人）であった。

3. ブラジル人学校選択にみられる親の教育戦略

(1) ブラジル人学校選択の経緯

現在ブラジル人学校に在籍する児童・生徒のうち、来日後最初からブラジル人学校に通っているのは5割強であり、日本の学校からの転入学がおよそ4割である。日本の学校からブラジル人学校に移るまで一時的に不登校・不就学であったケースおよび無回答が残り1割を占める。つまり、約9割の児童・生徒は、これまで日本の学校かブラジル人学校のいずれかには通っていたということになる。ブラジル人学校選択に際しては「親の意志」が強く働いている（親の8割がそのように回答）。親がブラジル人学校を選択した主な理由の1番目は、ブラジルで進学するのに役立つこと、2番目はポルトガル語で勉強できること、3番目はポルトガル語の勉強ができることである。なかでも、ブラジル進学におけるメリットをあげる親が圧倒的に多く、2位以下の4倍を超える。8割以上の親は子どもに大学以上の高学歴を獲得させ、医師、歯科医師、弁護士、技術者などの高度専門職に就かせたいと願い、そのために学習言語としてのポルトガル語の習得と成績向上を望むのである。その背景には、外国でブルーカラーとして低賃金で働く親自身の苦悩がある。親の最終学歴をみると、中卒と高卒が大部分を占め、大学卒以上は2割にも満たない。いずれブラジルに帰国したいとの希望をもっていることから、ブラジルの大学進学に目標を定めるに至り、そのために、本国の教育基準に則ってポルトガル語授業がなされるブラジル人学校を選ぶことにしたと考えられる。

(2) 高等教育への接続期待

根本的問題として、日本の高校進学・日本の大学進学を希望しても受験資格がない等の事態が現実として起こりうるが、親の関心は専らブラジル

進学にあるため、そうした問題には無自覚であるか、事実上の棚上げ状態になっていると思われる。肝心のブラジル進学については概して楽観的であり、ブラジル人学校での教育に対する満足度を問うと、「ポルトガル語を身につけられる」「ポルトガル語で学ぶので授業が理解しやすい」「ブラジル文化を身につけられる」「ブラジルで進学するのに有利」の4点については9割以上が満足しているとの結果であった。もちろん、具体的に問うと、授業の進行状況、教師の質、教師と親の連携等への要望や不安・不満を表明する者もあり、必ずしも満足すべき教育環境が整っているとはいえない。現実には、ポルトガル語授業を受けてさえいればブラジルの大学に進学できるわけではなく、親が積極的に子どもの勉学をサポートしても、学校での指導が効果的になされていなければ期待される成果は得られない。しかし、日本の学校と比べての学力低下への懸念をもつ親は2割未満しかおらず、勉学に関して学校への信頼は篤い。

このように、ブラジル人学校における教育に関する親の現状認識をみると、教育の質や程度については期待が先行している感がある。

(3) 日本社会との交流およびバイリンガル志向

日本人との交流が「不要である」と明言する親は1割に満たないものの、「必要である」と述べる者も4割止まりである。親自身は、交流が自分の生活に必須のものとは考えていないと思われる。ところが、子どもにとって日本人との交流が必要かという問いに対しては6割が必要と答えており、「子どもが望めば」の3割弱を加えると9割近くの親が交流に前向きな態度を示している。別学を当然と考える者の比率は低く（2割）、学校に対しては、日本社会と触れあえるような機会をもっとつくってほしいとの要望が表明されている。ここでいう日本社会と触れあえるような機会とは、活きた日本語を学ぶ貴重なチャンスでもある。親は、高学歴とならんで言語能力を子どもの将来に役に立つものとして非常に重視しており、9割の親が日本語の授業数増を求めている。親がそれだけバイリンガルを志向するのは、複数の言語能力があれば、将来、有利な条件で就職することが期待できるからである。

しかし、現実をみると、親の思惑とは裏腹に、子ども同士の付き合いにおいて日本人との交流は減りつつある。また、学校の授業時間内で十分な日本語能力を身に付けることは難しく、日本・ポルトガル語両方が十分に話せる子どもは2割に満たないのが現状である。

(4) アンカーとしてのブラジル人学校

親がブラジル人学校を選択するのは、彼らが意図するせざるに関わりなく日本に定住化しつつある現実要因に因るところが大きい。つまり、この選択が結果として「親の里心・望郷心・愛郷心を満たす」ことにつながっているということである。滞日が長期化するなかで、日系ブラジル人の親の多くはお金が貯まったら、あるいは、母国の経済状況や治安が改善されたら帰国したいとの希望を抱いている。しかし、予定はたえず、時として帰国断念をも意識せざるをえない。そうした不安定な経済的・心理的状況において、子どものブラジル進学という目標は、親自身を故国につなぎとめる「アンカー」のような意味合いをもつと考えられる。子どもが大学進学する時期は、親にとっては、まさに帰国時期のデッドラインとしての象徴的な意味をもっているのではないだろうか。その意味において、ブラジル人学校は、親の関心を、子どものおかれた現実からそらせてしまうという側面をもっているということができる。

(5) ブラジル人の親にみるセグリゲート化の促進

ブラジル人学校は、子どもの将来の社会的安定・経済的向上を願う親の高学歴志向とバイリンガル志向を支え、実現させる過程となっている。そして、このブラジル人学校は、親にとって自らをブラジルにつなぎとめる「アンカー」としての象徴的・観念的な意味をもっていた。これらのことを踏まえてブラジル人の親の教育戦略をみると、ブラジル人学校は地域社会のセグリゲート化を促進させることにつながる可能性をもつといえよう。つまり、親は自覚的にセグリゲート化を望んでいるわけではないが、彼らの考え方や行動様式をみれば、セグリゲート化の方向に進んでいるといわざるをえない。しかし、そのセグリゲート化は大きな問題を抱えている。日本への定住化が絶えず進行しているなかで、ホスト社会との隔絶は、教育制度の断絶を介して、子どもの将来に深刻な影響をもたらすことが予想されるからである。

4. ブラジル人学校生徒の生活と意識

前節では、ブラジル人の親たちは、自らをブラジルにつなぎ止める「アンカー」として、子どもたちをブラジル人学校へ通わせており、その結果として、セグリゲート化もまた引き起こされているということが明らかになった。

しかし、ブラジル人学校に通っている生徒たちは、全員が同じ様な傾向を有しているというわけではない。各生徒たちは、それぞれ違った生活を

送っており、その意識は異なっている。本節では、生徒が日本の生活・文化にどれだけ順応しているかを示す指標として、生徒の日本語能力・日本人の友だちの有無に着目して、生徒の生活と意識を明らかにする。具体的には、日本語能力があり、日本人の友だちがいる生徒をAタイプ、日本語能力はあるが、日本人の友だちがいない生徒をBタイプ、日本語能力がなく、日本人の友だちもいない生徒をCタイプとし、生徒の類型化を行った。アンケートに回答した対象者174人を以上のように分類したところ、Aタイプの生徒が37人、Bタイプの生徒が82人、Cタイプの生徒が55人抽出された。

(1) ブラジル人学校生徒の放課後・家庭での生活

生徒たちは、放課後、および家庭でどのような生活を送っているのだろうか。アンケートの結果を見ると、ブラジル人学校生徒の多くは、放課後、友だちと遊ぶことが難しい状況にあるということがわかる。生徒の多くはスクールバスで通学しており、中には、埼玉県から学校に通っている生徒も存在する。実際、生徒の約6割が放課後すぐに帰宅すると答えており、学校外に遊びに行くという回答をした生徒は、3.7%に過ぎなかった。アンケートの自由回答欄では、通学時間の長さが負担になっているという書き込みもいくつか見られた。

上記の結果をみると、ブラジル人学校生徒の生活は、学校と家庭の中だけで完結しているという傾向が読みとれる。しかし、ブラジル人学校生徒の全員が「閉じた環境」の中で生活しているわけではない。

例えば、放課後に遊ぶ友だちの数は、各類型ごとに異なっている。Aタイプでは、10人以上いると答えた生徒が約4分の1いるのに対して、Bタイプでは10人以上と答えた生徒は、1割に満たない状況であり、さらにCタイプでは、友人の数が10人以上いると答えた生徒は1人もいない。また、地域の子ども会への加入状況では、Aタイプの生徒の約4分の1が子ども会に入っているのに対して、Bタイプの生徒では2.4%にとどまっており、Cタイプでは子ども会に入っている生徒はいない。

このように、ブラジル人学校は全般的に見れば「閉じた環境」であると言えるが、ブラジル人学校の生徒の中でも、特にAタイプの生徒は、活発な交友関係を学校外でも持っていると言えるだろう。

(2) ブラジル人学校生徒の意識

ブラジル人学校に対する評価は総じて高く、生徒たちはブラジル人学校での生活に満足していると言える。約7割の生徒が、このままブラジル人

学校へ継続して通いたいと答えており、日本の学校へ移りたいと考えている生徒は、約1割程度しかいない。

ブラジル人学校に入学した理由では、「ブラジルでの進学に有利」という回答を約6割の生徒が選択しており、生徒たちは具体的な目標を持って、ブラジル人学校に通っているという傾向がうかがえる。一方、「親が決めたから」という回答を選択した生徒の割合は、46.5%であった。これは同内容の質問に対する親の回答結果よりも遥かに低い数字である。生徒たちは、親の期待を受け止め、ブラジルで進学、就職をするという具体的な目標を持ち、自分なりに納得してブラジル人学校に通っていると言える。ちなみに、日本の学校に通っていた子どもも同じ理由で転校することが多く、いじめや同化圧力を理由に日本の学校を辞めることは少ない。

とはいえ、ブラジル人学校での生活をどのよう感じているかは、各類型によって異なっている。Aタイプの生徒は、Bタイプ、Cタイプの生徒にくらべて、学校での授業に積極的な楽しみをあまり見いだしていない。学校での楽しみをたずねた質問で、「好きな授業を受けること」と答えた生徒は、Aタイプでは約4割だったのに対して、Bタイプ、Cタイプでは約7割となっている。

一方、学校生活に悩みを感じているのは、Cタイプ、Bタイプの方である。特に、Bタイプの生徒は約6割が、「悩みがある」と回答しており、他のタイプの生徒よりもその割合は高くなっている。悩みの内容を見ると、「成績」を挙げているのは、Aタイプの生徒では、悩みがあると答えた者のうち約4割だったのに対して、Bタイプ、Cタイプではともに7割以上に上っている。そのうちBタイプは、「成績」の他に、「授業」や「友だち」に関しても悩みを感じる生徒の割合が相対的に高くなっている。つまり、Bタイプは授業を楽しみとしながらも、成績や友だちに関して悩みを抱えるという点で特徴的である。

(3)ブラジル人学校生徒の将来志向

ブラジル人学校生徒の多くは、ブラジルでの進学・就職を希望している。約6割の生徒がブラジルでの進学を希望しており、日本での進学を希望する生徒は1割に満たない。また7割以上の生徒が、将来ブラジルに居住することを希望している。ブラジル人学校に通うという選択を行い、そのことを肯定的に生徒たちは捉えている以上、生徒たちのこういった将来志向は当然であるとも言える。こうした結果を見ると、ブラジル人学校は、生徒の日本での生活にかかわらず、ブラジルへの志向

性を強化する役割を果たしていると言えるだろう。その意味では、ブラジル人学校は、生徒の意識のレベルにおいても、セグリゲート化の進展に寄与している。

しかし、生徒たちのこうした将来志向は、現実の生活との整合性を持ち得るのだろうか。日本での生活、文化にある程度順応していると考えられるAタイプの生徒でも、過半数が将来ブラジルに居住したいと答えている。だが、ブラジルの学校に進学したいと答えている者は4割程度で、親の期待との間に齟齬を生じている。

また、Bタイプの生徒は、Aタイプよりもブラジルへの志向性が強いが、ポルトガル語能力が十分でないため、学校の授業や、友だちとの関係で困難を感じている生徒の割合が高い。完全にブラジルへ帰国することを前提にし、ポルトガル語を駆使できるCタイプの生徒にしても、ブラジルへ帰国できるという保障は全くなく、日本での滞在期間が長引く可能性が高い。

ブラジル人学校は、日本社会の中で様々な制度的矛盾を抱えているが、そうした矛盾は、ブラジル人学校生徒の生活と意識の間に生じる矛盾という形で、顕在化してきているとも言えるだろう。

5. ブラジル人学校教師の生活と教育意識

(1)ブラジル人学校教師までの歩み

それでは最後に、実際に子どもたちを教育しているブラジル人学校教師の生活と教育意識について見てみたい。

太田・大泉地区のブラジル人学校教師は、女性が多いのが特徴である。年齢は、20～50歳代までに幅広く分布している。全員が専門学校卒以上の学歴を有し、ほとんどが大卒以上である。また、全ての者が本国の教員免許を持っており、大半が本国で教員を経験している。

そのような中で、教師たちは日本へと出稼ぎのためにやってきた。日本では他のブラジル人と同様に、電機製品や自動車などの生産といった単純労働に従事してきた。その中で、ブラジル人学校の開設を知り、教師となったのである。多くの教師は「教育に携わりたかった」から教師になったと答えており、本国でも従事していた教職に自ら望んで就いている様子が看取できる。収入は年齢によって多少違いがあるが、月に手取りで20万円前後と決して高くはなく、むしろ単純労働の方が高いくらいである。にも拘らず、仕事内容に満足している者は非常に多い。このように、教師たちは、ブラジル人学校という職場に望んで入り、満足した教師生活を送っていると言える。

(2)教育への自負心と教育意識

満足できる教師生活を送る教師たちは、自分たちの提供する教育について大きな自負を持っている。かれらは、ポルトガル語での教育やブラジルでの進学・就職に有利であるという点をブラジル人学校の「良い点」と一様に認めているのに対し、日本語能力の低下や日本での進学・就職の不利、日本人との関係の希薄化などを「悪い点」と認める者が少数にとどまっていることにそのことが表れている。また、このような教育への自負心は、親たちへの不満を惹起することにもなる。「(親はもっと)子どもに専念してほしい」という声を寄せるなど、多くの教師は、熱心な自分たち教師とは対照的に、親は子どもの教育を真剣に考えておらず、学校にも非協力的だと感じている。ブラジル人学校をよりよくしていくためには、自分たちの努力だけでなく、親の協力が必要だと考えている。

そのような教師たちが目標とする教育は、あくまでブラジルの教育である。教師たちは、学校の方針に合致する形で、ブラジルで進学・就職させることを目標に教育を行っている。ゆえに、日本語の教育が行われているといっても、学校により差異はあるが週に1~2時間といった最低限のものに止まっているのが現状である。先に見たように、親はバイリンガル志向もあって日本語教育の充実を求めているが、学校や教師たちは、現在の日本語指導で十分だと考えている。

(3)教師たちの日常生活

教師たちが日本語の習得をあまり重視せず、専らブラジルの教育を重視するのは、教師たちの日常生活を一つの背景にしている。

教師たちは、普段日本人と接することはあまりない。まず、ブラジル人学校という職場には日本人は基本的には存在しない。職場で日本人と接触しなければならない単純労働に携わる一般のブラジル人と対照的である。また、職場以外でも日本人との交流はほとんどないようである。それは、教師の多くが日本語には不自由であるにも拘らず、生活全般への満足度は非常に高いということに伺える。つまり、教師たちは、日本語能力が必要な日本人との交流なしに、満足した日常生活を送っているのである。そして、そのような生活を可能にする条件として、エスニック・コミュニティの存在も指摘できよう。また、日本語を勉強したいと答える者は少なくないが、実際に日本語教室に通っている者はわずか1人であり、逆に日本語教室には通わないと答える者もいるなど、日本語の学習意欲もそれほど高いとは言えない。このよう

に、日本語ができず、日本人との交流がなくても満足した日常生活を送っているために、教師たちは、日本語の習得に特に必要を感じていないということが言えるのである。

(4)教師たちの将来志向

さらに、教師たちが日本語の習得を重視せず、ブラジルの教育を目標とするもう一つの理由は、教師たちが帰国志向を持っているからである。既に見たように、親は非常に強い帰国志向を持っており、そのために子どもをブラジル人学校に通わせている。教師自身も、自分の子どもを本国で進学させたいと考え、ブラジル人学校に通わせている。このように親の意識と共通する部分を持っているため、親の意向を汲み、いずれは帰国する子どもたちなのだからブラジルの教育を与えたいとの考えに至っていると言えよう。

以上の理由により、教師たちは日本語の習得をあまり重視せず、専らブラジルの教育を重視しているのである。そしてここには、子どもたちのホスト社会との関わりへの配慮はほとんど見出すことができない。

(5)ブラジル人学校に愛着を持つ教師

以上見てきたように、多くの教師たちは、出稼ぎという形で来日し、単純労働を経験していた。しかし、ブラジル人学校教師になることによって、自分の専門を生かした仕事と、エスニック・コミュニティの中だけで生活できるという居心地の良さの両方を獲得することができた。つまり、ブラジル人学校は、教師たちを単純労働の世界から救い出すという役割を担ったのである。

こういった経緯を踏まえると、教師たちは、ブラジル人学校に強い愛着を持っていると言える。実際、転職の意志を持つ者はほとんどいない。このように、ブラジル人学校は、教師たちの愛着に支えられて存続していくことにもなると言えよう。

しかし、教師たちが感じるブラジル人学校の居心地の良さは、ホスト社会との隔絶を可能にするということに担保されている。そして、そのような居心地の良さは、教師たちに、ホスト社会との接触を軽視し、一途にブラジルに向かう教育を行わしめることになっている。そしてそこでは、子どもたちのホスト社会との関係などは顧慮されていないのである。このような形でブラジル人学校の教育が継続されることになれば、ブラジル人学校は、「閉じた場」として、今後、ホスト社会とのセグリゲーションを推し進める役割を果たすことになるであろう。

6. 結語

以上、親・子・教師の三者に注目しながら、ブラジル人学校の姿を見てきた。この中で明らかになったことをまとめてみたい。

まず、ブラジル人学校への通学は、親から子どもへの教育期待の大きさによって実現されていた。このことは、ブラジルでの進学を目標とした教育を熱心に行うという教師の対応とも符合していると言える。また、自身も子どもを持つ身である教師にとっては、親の子どもへの期待に共感して、さらに熱心にブラジルでの進学を目指した教育を行っているとも言えよう。

ただ、一方では、親はブラジル人学校に、ブラジルの教育と共に日本語の教育も期待し、子どもがバイリンガルになることを期待している。ところが、教師の側は、日本に住んでいる限り日本語習得の必要性があることは認めつつも、現状の日本語教育で十分であると考えており、親のバイリンガル志向に応える姿勢は持っていない。さらに、多くの子どもの生活は、長距離通学などの影響もあって家庭と学校の往復の中で完結しており、日本人との接点はあまり持っていない。そのこともあって、日本語に触れる機会の少ない子どもたちは、親の期待とは裏腹に、日本語能力を高めることが難しい状況に置かれている。

子どもの進学先について、多くの親は、ブラジルを希望している。これは、親の強い帰国志向と結びついている。そのことにより、子どものブラジルでの進学、そしてそれを実現させるためのブラジル人学校通学というのは、親たちが自身を故国につなぎとめる「アンカー」としての機能を持っているのである。しかし、ブラジルでの進学という目標を共有しない子どもも存在する。もちろん、ブラジルでの進学を希望する子どもが多数派ではあるが、現に、日本の学校経験を持つ子どもたちには、日本での進学・生活を望む意識も看取される。このように、帰国の願いを子どもの学校選択に託す親、その親の願いを内面化し、ブラジル人学校への通学を肯定的に捉える多数派と親の願いを共有しない少数派からなる子どもたち、そして自ら望んで教職に就き、自負を持って熱心に教育を行う教師たちという、各々の論理が交差する中で、ブラジル人学校は存在しているのである。

だが、このように子、その親、そして教師たちは各々の論理でブラジル人学校に関わっているのだが、この三者に総じて言えることは、概してホスト社会との関わりが希薄になっていることである。ホスト社会と交流していく上では重要なツールとなる日本語能力も高くはない。それにも拘ら

ず、生活全般には高い満足度を示している。このことは、日本語なしでも満足した生活を送ることができる現実、すなわち、強固なエスニック・コミュニティが形成されている現実を看取できる。

また、かれらはこのようにホスト社会と隔絶し、エスニック・コミュニティの中だけで自分たちが生活していることに対する問題意識もほとんど持っていない。親は、子どもに対してはホスト社会との交流の必要性を認めつつも、自分たちにとっては交流が必須のものとは考えていない。また、教師たちにあっては、子どもたちのホスト社会との関わりそのものについての関心が薄い。しかし、子どもたちは現に家庭と学校を往復するのみの生活の中で、ホスト社会との断絶を確実に進行させている。この点は、ブラジル人と日本人が同じ教室で学んでいる日本の学校に通う場合と明らかに異なる。また、ブラジル人学校は、教師たちにも、エスニック・コミュニティ内部に閉じた労働-生活の両面を提供するという効果を持っている。以上のことから、ブラジル人学校は、子どもたちや教師たちにエスニック・コミュニティ内部に閉じた生活を送ることを推し進める働きをしているとも言えよう。冒頭で指摘したように、日本の学校ではなく、ブラジル人学校同士の交流を深めていることを考え合わせると、太田・大泉地区のブラジル人学校は、「共生」を実現する橋頭堡としての学校の可能性を減じ、「閉じた場」としてホスト社会とのセグリゲーションを徹底させることになるだろうと言わざるを得ない。

ただ、ブラジル人学校が存在する状況に、必ずしも展望が無いわけではない。現段階でも「補助的な」性格を残すA校にあっては、親・子・教師のいずれにおいても、ホスト社会との断絶を危惧する向きが、他校に比べて強い。このことは、ポルトガル語やブラジル文化の保持と、ホスト社会との関係の保持とが、二律背反ではないということを示している。このことから、ブラジル人学校での教育によって、自文化を残しながら、可能な部分でホスト社会との関わりを持つという“segmented assimilation” (Schmid 2001) と呼べるような新たな「共生」のあり方も展望できるのではないだろうか。

<文献>

- Schmid, Carol L. 2001, “Educational Achievement, Language-Minority Students, and the New Second Generation,” *Sociology of Education Extra Issue 2001*, pp.71-87.